立正大学

古書資料館通信

Vol.12

『太しよくはん』

目 次

貞松文庫について（３）　Ａ８１～Ａ８４の資料紹介 …… １頁
　寛永の刊記を有する整版本 …… １頁
　唐本の『字彙』 …… ３頁
注 …… ５頁
表紙資料紹介 …… ５頁

立正大学図書館略史（品川キャンパス）――古書資料館前史として　第１２回

今回も、前号に掲載した A81～A84 の簡易リストの中から、資料をいくつか紹介して行きたいと思います。なお、リストの続き（A85～A89）は次号に掲載する予定です。

貞松文庫について（３）　Ａ８１～Ａ８４の資料紹介

〈寛永の刊記を有する整版本〉

まず、前号に掲載したリストの中から、寛永の刊記をもつ整版本を取り上げます。該当するのは以下の 4 点です。

A83/10　孔子家語 10 巻 ／（魏）王粛 註。5 冊（26.5×19.0cm）。京、風月宗智、寛永 15 年（1638）。【貞】【寄】

A84/2　増註唐賢絶句三体詩法（三体詩素隠抄）3 巻 ／（宋）周弼 選,（日本）素隠 鈔。13 冊（26.4×19.3cm）。京、西田勝兵衛尉、寛永 14 年（1637）。【貞】【寄】

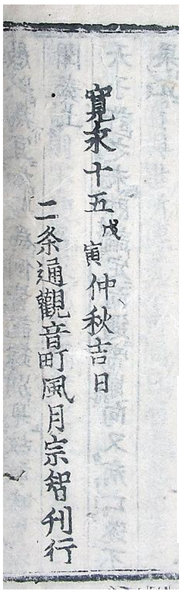
A84/13　中華若木詩抄 3 巻 ／如月[寿印]註。3 冊（27.2×19.6cm）。豊雪斎道伴、寛永 10 年（1633）。【貞】【寄】

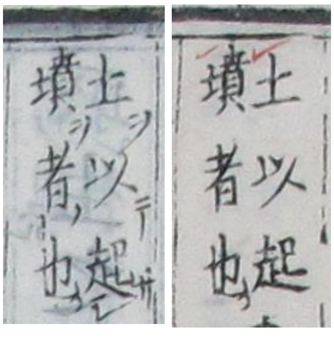
A84/46　真草倭玉篇 5 巻 ／ 5 冊（13.2×20.0cm）。京、林甚右衛門、寛永 20 年（1643）。【寄】

現在伝わる『孔子家語（こうしけご）』は偽作で、魏の王粛（おうしゅく）（195～256）が、孔子に関する記事を先行する資料から集めたものです。もともとあった『孔子家語』は散逸したとされています[1]。A83/10 の『孔子家語』は、元和年間（1615～1624）の古活字版を覆刻し、風月宗智が寛永 15 年に刊行した和刻本です[2]。宗智は京都の書肆、風月庄左衛門（風月堂）の初代の名になります[3]。

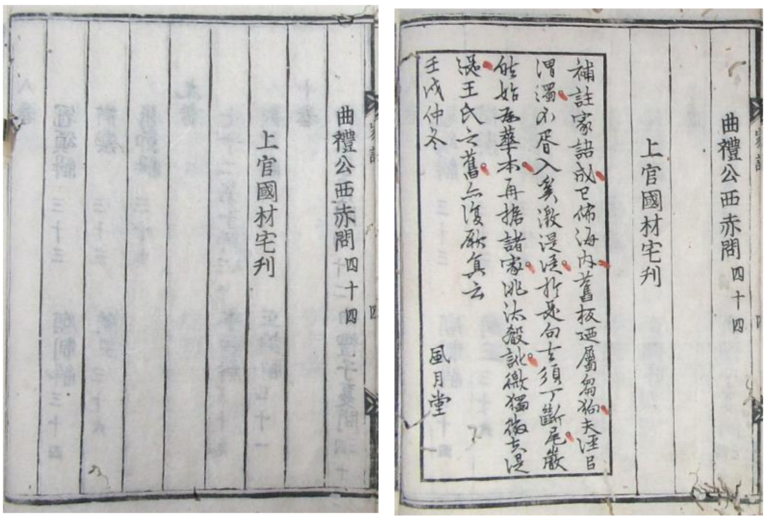
ところで古書資料館には、A83/10 以外にも、寛永 15 年版の『孔子家語』がもう 1 点あります（A83/9）。この 2 点は同版本ですが、完全に同じではありません。A83/9 の方は、版木に修正を加えた上で、寛保 2 年（1742）に刷ったものと推定されています[4]。修正箇所としては、本文から返り点などを削り、上欄に注を加えた他、篇目の末尾に文章を追加しています（図 1-2, 3 参照）。刷られた年を寛保 2 年とするのは、

図1





2. 返り点などの比較
左：寛永 15 年版　返り点あり
右：寛保 2 年修　返り点が削られている



1. A83/10『孔子家語』の刊記
「寛永十五戊寅仲秋吉日／二条通観音町風月宗智刊行」

3. 篇目の末尾
左：寛永 15 年版　右：寛保 2 年修

この追加の文章に基づきます。

A84/2 の『増註唐賢絶句三体詩法』は「三体詩素隠抄」とも呼ばれます。『三体詩』は、中国宋末の周弼が唐代の詩人の近体詩を集めて編纂した漢詩集です。「三体」とは七言絶句・七言律詩・五言律詩の三種類の漢詩体のことを言います。この『三体詩』は中国で流布し、日本でも注が付けられました。「三体詩素隠抄」もその一つです。「素隠抄」とは素隠の注釈書という意味ですが、「素隠」は臨済僧の説心慈宣（～1626）になります。

A84/13 の『中華若木詩抄』は、臨在僧の如月寿印（1534 年生存[5]）が中国人と日本人の漢詩を集めて注釈を加えた書です。寛永 10 年版の刊行者である「豊雪斎道伴」（図 3 参照）とは、中野道伴（市右衛門）のことです。道伴と弟の道也（小左衛門）は、共に寛永期の京都で書肆を営んでいたことが知られています[6]。

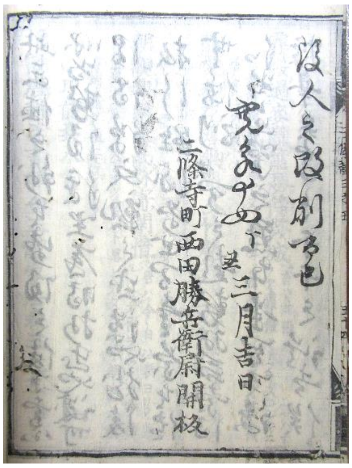
A84/13 には、以下のような署名と、蓮永寺以外の蔵書印が見られます（図 4-1 参照）。

①貞松／日圭〔花押〕　　　（墨書）
②智本日心　　　　　　　　（墨書）
③知本日心　　　　　　　　（蔵書印　5.1×2.2cm）

①の「日圭」とは、蓮永寺 17 世だった一心院日圭（～1751）のことだと推定されます[7]。②と③には「智」と「知」の違いがありますが、同じ人物の署名でしょう。「智（知）本日心」は、貞松文庫の蔵書に多く書き入れられている名称の一つです。この日心という人物は日圭の弟子であったと考えられます。それは、A71/74 の『正法華経』に、「（貞松第十六世／一心院日圭聖人）弟子　智本日心」と書き入れられていることから分かります（図 4-2 参照）。なお、この書き入れでは日圭を 16 世としていますが、16 か 17 かは歴世の数え方の違いによるものと考えます。

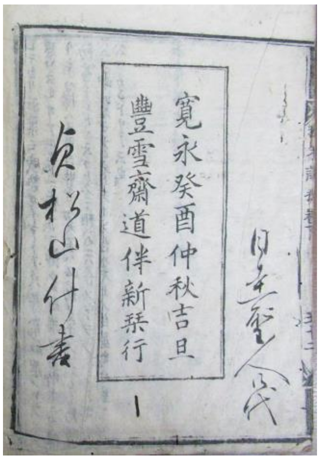
日圭と日心両方の名が見られるということは、A84/13 の『中華若木詩抄』が日圭から日心の手に渡ったことを意味するでしょう。A30/25 の『観無量寿仏経疏』を見ると、両者の間に蔵書の授受があったことが明確に書かれています（「従

図2



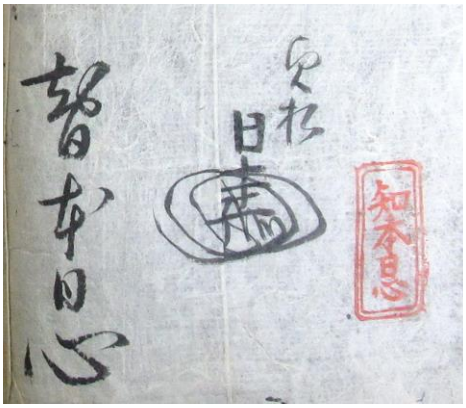
A84/2『増註唐賢絶句三体詩法』刊記「寛永十四丁丑三月吉日／二条寺町西田勝兵衛尉開板」。

図3

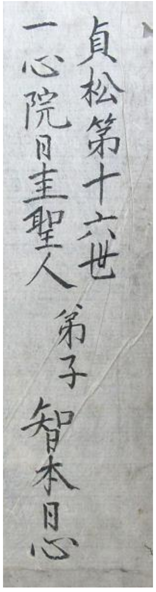


A84/13『中華若木詩抄』刊記「寛永癸酉仲秋吉旦／豊雪斎道伴新栞行」。左右には「日圭聖人御代」「貞松山什書」という書き入れあり。

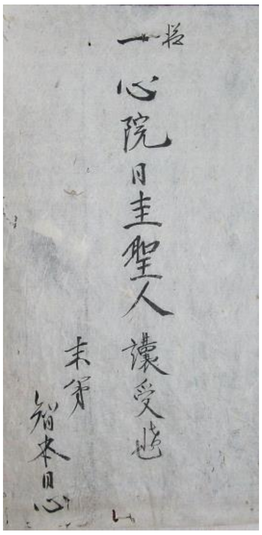
図4



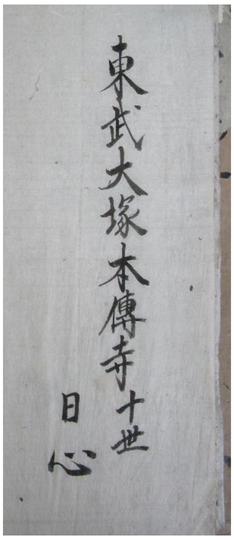
1. 署名と蔵書印
A84/13『中華若木詩抄』第 2 冊見返し



2. A71/74『正法華経』
第 1 冊見返しの書き入れ →



3. A30/25『観無量寿仏経疏』



4. A02/103『録内扶老』
第 1 冊見返しの書き入れ

一心院日圭聖人譲受者也／末弟智本日心」、図4-3参照)。A84/13も、日圭が生前に日心へ譲ったものかもしれません。

智本日心の名は、蓮永寺の歴世の中には見られません。そこで、日心についてもう少し調べて見ることにしましょう。貞松文庫の中にある『録内扶老』(A02/103)には、「東武大塚本伝寺十世／日心」という書き入れがあります（図4-4参照)。筆跡は異なるようにも見えますが、この日心が智本日心と同一人物だという可能性はあります。本伝寺は、江戸の大塚にあった大法山本伝寺（現文京区大塚）のことで、江戸時代には蓮永寺の末寺でした。本伝寺の歴世を調べてみると、10世は寛量院日裕（～1792）だったことが分かります[8]。日裕は、蓮永寺の23世となった人物で、その字を智本といいます。つまり、智本日心＝寛量院日裕である可能性が出てきます。その場合「日心」は、日裕を名乗る以前に用いていた名ということになります。日心が日裕であれば、貞松文庫の蔵書に日心の署名が多く見られるのも納得できます。ただし、日圭と日裕の生年が不明で、両者の没年が40年以上開いている点が懸念材料ではあります。

A84/46の『真草倭玉篇』は、『倭玉篇』の一種です。『倭玉篇』は、漢字の和訓を調べるための漢和辞典で、中国の『玉篇』を範とし、漢字を部首によって分類しています。『倭玉篇』は室町時代に成立したとされていますが、江戸時代には様々なバリエーションが出版されました。『真草倭玉篇』もその一つです。書名の「真草」は、漢字の楷書（＝真）と草書（＝草）を意味します。各項には、漢字の和訓だけでなく、楷・草二種類の字体が掲載されています（図5参照)。

この A84/46 は裏打ち補修がされており、破れた箇所を補写した跡があります。この補修は近年に施されたものではありません。背側の小口に「日富」と墨書されているので、補修したのは日富の可能性があります。日富については前号でも触れましたが、蓮永寺28・29世を勤めた日蓮宗の僧です。

図5

A84/46『真草倭玉篇』刊記
「寛永（癸／未）初夏吉旦／三条通菱屋町／林甚右衛門」。

〈唐本の『字彙』〉

A80番代には、準漢籍・日本漢詩などの書が多いですが、僅かに中国で刊行された唐本も存在します。A81～A84の中では、A84/412の『字彙』がそれに当ります。次に、この『字彙』を紹介していきたいと思います。書誌事項は以下の通りです。

A84/412　字彙 12巻首1巻末1巻 ／（明）梅膺祚 音釈。14冊（26.4×16.7cm)。[江陰]、玉樹堂（郁文周)、[出版年不明]。万暦43年（1615）序。【寄】

『字彙』は、明の梅膺祚（1573年、没年不詳[9]）が著した画引きの漢字字書です。一巻目が子集、二巻目が丑集のように、各巻は十二支の名で呼び分けられており、一画から十七画までの漢字を引くことができます。首巻には、梅鼎祚による万暦43年の序文があります。

図6

A84/412『字彙』 見返しと序首
＊見返し下の印記は不詳。

最初に刊行されたのもその年で、初版のものは台湾国家図書館が所蔵しています[10]。

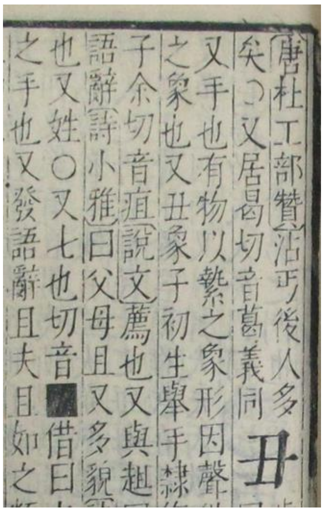
ちなみに、序文を書いた梅鼎祚（1549～1615）は梅膺祚の従兄で、戯曲作家として知られた人物です[11]。序文の末尾には梅鼎祚の印影が刷られており、印記には「梅印／鼎祚」（梅鼎祚印）、「梅蔵／禹金」（梅禹金蔵）とあります。「禹金」は梅鼎祚の字（あざな）です。

この『字彙』に刊記はありませんが、見返し（封面、図6参照）には、「宣城梅誕生先生訂／字彙／玉樹堂梓行」とあります。「誕生」は「梅膺祚」の字、「宣城」（現安徽（あんき）省宣城（せんじょう）市）は出身地です。ここで重要なのは、「玉樹堂」という刊行者の記載がある点でしょう。玉樹堂という書肆は日本にもありますが、A84/412の『字彙』は唐本です。それは、少し縦に長い本の形状や紙質などから判断できます。中国の書肆であることを前提とし、玉樹堂について調べると、明代の万暦年間（1573～1615）に出版活動をしていた郁文周（いくぶんしゅう）（江陰（こういん）の人）の室名が「玉樹堂」であったことが分かります[12]。封面の「玉樹堂」が郁文周を指すならば、A84/412は、明末か清初に出版された可能性が出てきます。『字彙』は、様々な中国の書肆によって刊行されていますが[13]、その中でも比較的早い段階のものということになります。

国立公文書館には、明代刊の『字彙』である紅葉山文庫本（経047-0007）と、明刊（清印）の鹿角山房蔵版本（278-0100）の所蔵があります。これらをA84/412と比較してみると、版式がそっくりであることが分かります。しかし、字形が微妙に違うので、同じ版木で刷られたものではないでしょう。

3点には、字形以外にも異なる点があります。たとえば、鹿角山房蔵版本では寅集の巻頭に「古呉馮夢龍猶重訂」とありますが、この記載は紅葉山文庫本や A84/412 に見られません。紅葉山文庫本とA84/412の間でも墨格（版木を彫り残している部分）の有無に違いが見られます。A84/412には子集の3丁表の4行目に一文字分墨格がありますが（図7参照）、紅葉山文庫本に墨格はなく、その箇所は「跙」となっています。またA84/412には、巻末の最終丁の末尾に「醒誤完」とありますが、紅葉山文庫本では、その行が一行分墨格になっています。

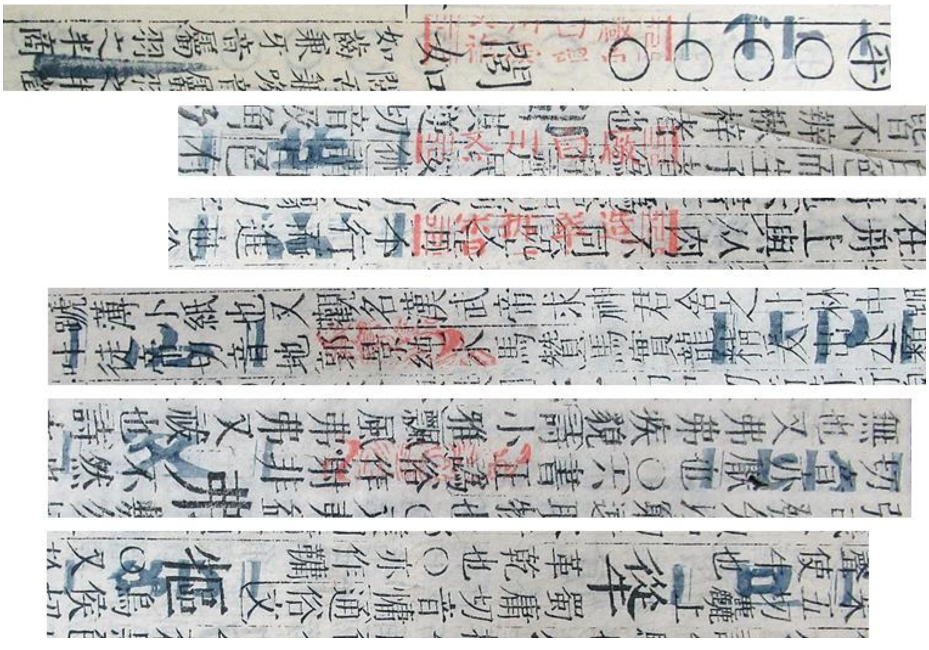
図7



A84/412『字彙』子集　3丁表4行目の墨格　＊小字双行で数えると7行目

A84/412には、ところどころに印の一部分の印影が見られます。これは、紙を複数重ねてずらし、その上から印を押したものと推定されます。それらの印影を並べてみたのが図8-1です。残念ながら一つの完全な印にはなりませんでした。

図8



1. 割印の部分
朱の印では、厰／白／川／文／祚の文字が読み取れる

2. 佐久間掌菓の印
3.7×2.0cm

A84/412 には、これらの印とは別に旧蔵者の蔵書印が押されています。それが「掌菓園／図書信」という緑色の印です（図 8-2）。国文学研究資料館の蔵書印データベースを検索すると、この印の持ち主は佐久間掌菓という江戸の人物であることが分かります（蔵書印 ID: 01765）。ただし、蔵書印データベースに掲載されているのは朱の印で、A84/412 とは字形が異なります。印の持主は同じだと考えられますが、印自体は別のものでしょう。

この佐久間掌菓という人物の経歴は不明ですが、ケンブリッジ大学所蔵の『管子箋註』（FB.805.2）には蔵書印データベースと同じ印が押されています[14]。こちらは朱でなく緑の印です。『管子箋註』は文化 2 年（1805）の刊行なので、佐久間掌菓も江戸後期の人と推定されます。

次回は、簡易リストの続きと、リスト掲載部分の資料を紹介する予定です。

注

1. 近藤春雄『中国学芸大事典』（大修館書店、1978 年）、「孔子家語」の項。
2. 山城喜憲「知見孔子家語諸本提要（一）」（『斯道文庫論集』21、1984）、221 頁。元和の古活字版は「国立公文書館デジタルアーカイブ」で公開されている。〈https://www.digital.archives.go.jp/img/1076527〉2021 年 10 月 12 日確認。請求記号は「298－0015」。
3. 井上隆明『改訂増補近世書林板元総覧』（青裳堂書店、1998 年）、614 頁。
4. 注 2 山城論文、227 頁。
5. 市古貞次[他]編『国書人名辞典』2（岩波書店、1995 年）、「如月寿印」の項。
6. 安藤武彦「出版書林中野道伴関係資料」（『日本古書通信』376、1975 年 8 月）。
7. 日蓮宗事典刊行委員会編『日蓮宗事典』（日蓮宗宗務院、1981 年）の蓮永寺の「歴代譜」（1287 頁）参照。
8. 日蓮宗寺院大鑑編集委員会編『日蓮宗寺院大鑑』（池上本門寺、1981 年）の「本伝寺」の項（31 頁）の歴世の記載による。
9. 劉玲・沈涵「『字彙』の明刊本鹿角山房刻本とその和刻本を比較してみる『異体字弁』の成立―同じ字の同じ部件の書き方の異同に注目して」（『筑波日本語研究』25、2021 年）、19 頁。
10. 現物未見。台湾国家図書館の「館蔵目録査詢系統」〈https://aleweb.ncl.edu.tw/F〉で目録を確認（2021 年 10 月 28 日）。「版次」に「明萬曆乙卯(四十三年, 1615)江東梅氏原刊本」とある。「索書號」は「110.2 01037」。
11. 『岩波　世界人名大辞典』の「梅膺祚」「梅鼎祚」の項目参照。『岩波　世界人名大辞典』は JapanKnowledge〈https://japanknowledge.com〉で確認（2021 年 10 月 28 日）。
12. 瞿冕良編著『中国古籍版刻辞典　増訂本』（苏州大学出版社、2009 年）、128 頁。
13. 高橋良政「字書の活用―字彙を中心として」（『桜文論叢』70、2008 年 1 月）、94 頁。
14. 〈https://cudl.lib.cam.ac.uk/view/PR-FB-00805-00002/2〉2021 年 10 月 28 日閲覧。

立正大学古書資料館専門員　小此木敏明

表紙資料紹介

太しよくはん　3 巻 3 冊　913.41/Ta24/1-3
奈良絵本と呼ばれる絵入の写本で、室町物語の一つ。漢字表記は「大織冠」。「大織冠」は最高の冠位であるが、唯一の授与者である中臣（藤原）鎌足のことをいう。中国の太宗皇帝に嫁いだ鎌足の次女が日本に贈った宝珠めぐる顛末を描いている。表紙掲載箇所は、宝珠を守る中国軍と、それを奪おうとする阿修羅の軍勢との合戦を描いた場面。伊藤善隆編著『立正大学古書資料館蔵 奈良絵本『大織冠』上巻（中巻）―影印と翻刻―（シリーズ・アタラクシア vol.4, 5）』（立正大学図書館、2019-2021 年）に影印と画像が掲載されている。下巻（シリーズ・アタラクシア vol.6）は近年刊行予定。

立正大学古書資料館通信

第１２号

令和３年１０月３１日発行
編集・発行　立正大学図書館　品川学術情報課
〒141-8602 東京都品川区大崎 4-2-16
TEL：03-3492-6615
HP：http://www.ris.ac.jp/library/